大釈迦本宗　能忍寺

能忍寺たより

Vol.48

行事紹介

○七五三（しちごさん）

仏式七五三（しちごさん）は、お子様の成長を仏様やご先祖様に報告し、これまでの加護に対する感謝と、これからの健やかな成長を祈願する大切な儀式です。一般的には神社の行事というイメージが強いですが、仏教においても「成育の節目」を祝う伝統的な法要として、多くの寺院で営まれています。

儀式の大きな特徴は、本堂のご本尊の前で読経を受け、お子様が仏教の教えに触れる機会となる点にあります。仏様から授かる「智恵」や、他者を思いやる「慈悲」の心を育むことが願われます。また、一部の宗派では「身に受けるお守り」として数珠（念珠）を授与されることもあり、自分の命が多くの先祖や命のつながりの中に生かされていることを学ぶ、教育的な側面も持っています。

きらびやかな衣装に身を包んだお子様が、静かな本堂で手を合わせる姿は、家族にとっても命の尊さを再確認する貴重なひとときとなるでしょう。神社での参拝とはまた一味違う、厳かで落ち着いた雰囲気の中で行われる仏式七五三は、ご先祖様との絆を深め、家族の幸福を分かち合う、心温まる日本古来の慶事といえます。

今月のことば

○以心伝心（いしんでんしん）

「以心伝心（いしんでんしん）」は、言葉を使わずとも互いの心が通じ合うことを指す言葉ですが、もともとは禅宗の厳しい修行の中から生まれた仏教用語です。

この言葉は、仏教の真理や悟りの境地とは、文字や言葉だけで説明し尽くせるものではなく、師匠の心から弟子の心へと直接伝えられるものである、という教えに由来します。お釈迦様が蓮の花を黙って差し出した際、弟子の摩訶迦葉（まかかしょう）だけがその意図を理解して微笑んだという「拈華微笑（ねんげみしょう）」のエピソードがその象徴です。

現代では、阿吽の呼吸で通じ合う親しい間柄を表す言葉として定着していますが、その根底には、言葉を超えた深い信頼と、真実を見抜く鋭い感性が不可欠であるという、精神的な繋がりの尊さが込められています。

コラム　あれもこれも仏教用語

○根性（こんじょう）

現代では「気力」や「粘り強さ」を意味する「根性」ですが、もとはサンスクリット語の「インドリヤ」に由来する仏教用語です。

仏教において「根」は人間の心身に備わった能力を、「性」はそれが本来持っている性質を指します。つまり、その人が生まれ持った**「性質や能力」、あるいは「物事を受け止める心のあり方」**を意味する言葉でした。教えを理解する力が鋭い人を「利根」、鈍い人を「鈍根」と呼ぶのもこのためです。

江戸時代頃から、その人の本性や気概を表す言葉として一般に広まり、現在のように「苦難に耐える強い精神力」という意味で定着しました。単なる力みではなく、自分自身の深い内面と向き合う姿勢こそが、本来の「根性」の姿と言えるでしょう。

死後の7度の裁判

○四十九日って？

亡くなった方の追善供養として行われる「四十九日」には、実は死後の世界における「裁判シミュレーション」とも呼べるような、緊迫した物語が背景にあります。

仏教の伝統的な考え方によれば、亡くなった人は死後、次の生まれ変わり先が決まるまでの間、7日ごとに合計7回の裁判を受けるとされています。裁判官を務めるのは、あの有名な閻魔（えんま）大王を含む「十王」と呼ばれる10人の王たちです。

第1週から始まる裁判では、生前の殺生や盗み、嘘といった行いが厳しくチェックされます。遺族が7日ごとに法要を行うのは、裁判中の故人に対して「どうか良い判決が出ますように」と現世からエールを送り、善行を積んで徳を振り向けるためです。これは、いわば弁護側による「嘆願」のような役割を果たしています。

そして、その最終判決が下される運命の日が、死後49日目にあたります。ここで来世の行き先（六道）が確定し、故人は新しい世界へと旅立っていきます。この期間を「中陰（ちゅういん）」と呼び、生死の境界にいる故人が無事に成仏できるよう、残された家族は祈りを捧げるのです。

このように、四十九日は単なる形式的な儀式ではなく、故人が来世へと踏み出すための「人生の最終関門」を共に乗り越えるための大切な期間です。裁判という厳しい視点では恐ろしく感じるかもしれませんが、それは同時に、残された人々が故人のためにできる「最後の共同作業」であるとも言えるでしょう。